

2004 年度第 4 班第 6 回研究会 報告書

日 時：2005 年 1 月 27 日 AM10：00 - 12：00
場 所：龍谷大学 深草キャンパス 紫英館第 2 共同研究室
司 会：斎藤 文彦（LORC 副センター長、第 4 班代表）
参加者：青木 恵理子（社会）
 大林 稔（経済）
 河村 能夫（経済）
 川端 正久（法）
 舟橋 和夫（社会）
 中村 尚司（経済）
記 録：金湛（第 4 班 RA）

会議内容：

1. 今年度の予算執行状況
2. 来年度およびその後の活動の方向性
3. 今年度の活動の総括

配布資料：

「2004 年度 LORC の予算執行状況」、「2004 年度総括メモ」、「地域 ORC 班別年次計画」

今年度の予算執行状況

「2004 年度 LORC の予算執行状況」は LORC の活動に使われた費用を品目別に集計したものである。その内容の構成は、支出項目、内容、金額、予算科目名の 4 つからなっている。今年度の LORC 全体の支出の中で、国際シンポジウムの出費はかなりの部分を占めている。

来年度およびその後の研究方向

2005 年度（3 年度目）は中間評価にあたる年であり、1 年度目と 2 年度目の活動に対して申請時の目標をどれくらい達成できたのかが検証される。各班によって進み具合が違うが、中間評価に基づいてこれまでの活動を整理し、残りの 3 年の活動を進めていくことになる。2005 年 2 月 4 日に全体総会が開かれ、各班の代表者が報告を行い、参加者からのコメントを受けることが予定されている。班の代表者が参加者の意見を検討し、これからの活動に反映するように努力する方針である。

4 班の総括は「2004 年度総括メモ」にまとめられており、4 班メンバーの意見や意向を参考し、反省と今後の取り組みを考える。

4 班の役割は、アジア 3 カ国・アフリカ 3 カ国を対象として、地方分権化・地方制度改革の中での人材育成のあり方について比較研究をし、日本の国内を対象とする 1 班から 3 班とその内容を結びつけながら研究を行っていくことである。

現段階ではルワンダ以外の国では、それぞれの国で現地の大学教員などの協力が得られた。インドネシアでは Deddy Tikson 氏 (Hasanuddin University) は以前から河村教授とともに JICA のプログラムに携ってきた経験があり、LORC の研究に協力することを約束した。そして、南アフリカでは、Brij Maharaj 氏 (Professor, Department of Geography, University of Natal)、ウガンダでは Frederick Golooba-Mutebi 氏 (Associate Research Fellow, the Makerere Institute of Social Research, Makerere University)、インドでは K.N.Harilal 氏 (Centre for Development Studies) の協力が得られた。したがって、来年度からこれらの研究者を 4 班の正式メンバーとして、活動に加わることが決まった。このことによって、以上の国での研究活動の準備は整いつつある。しかし、ルワンダについては同国の国内事情により、現在では音信不通の状態になっている。したがって、ルワンダの代わりに、セネガルを追加する可能性を検討する。

研究方法として、ペアをつくり国担当で研究を進めていく形を考えている。スリランカでは中村・Lakshman チーム、インドネシアでは河村・青木・Deddy チーム、インドでは斎藤千宏・Harilal チーム、南アフリカでは川端・Brij チーム、ウガンダでは斎藤文彦・Frederick チームという形で研究を進めていく。

研究成果として、以上の 6 カ国 (場合によってタイも含めて 7 カ国) の活動の結果を共著で英文の本にまとめ、序章と結論は総括的な内容とし、残りの章は各国の研究成果を配列する構成をとる。各章の内容は、ペアとなる研究者によって分担され、現地の制度に関しては、現地の研究者に依頼し、日本人研究者は自分の経験を生かしつつ第三者の目で現地のことを分析するという形にする。

ペアで行われる研究のメリットとして、日本の研究者にとってはより時間を有効に使いつつ、現地で活動を行うことが可能となる。日本と現地のネットワークにより研究を進めていく方が合理的であると考えられる。

研究テーマは、各国共通のものを決め比較研究を行う。例えば、インドネシアで調査が行われたとき、インドネシアの女性活動 (ジェンダー研究) の話題が浮かび上がった。ハサヌディ大学を中心に女性の研修を試みるのを LORC の研究の一環として行う可能性がある。

LORC 研究に重要と思われるのは、各国の調査を比較する軸を明確にして、研究を進めることである。4 班の対象国は 6 つがあり、それぞれの国の事情があるが、必ず共通するものがある。各国がばらばらにならず、統一性をもつ研究で、アジア・アフリカ共通したものをほりだすことは意味を持っている。そして、4 班の研究と LORC 全体の研究テーマを考えると、「参加型」と「地方分権化」が共通のキーワードとなっている。ここでは第 3 のキーワードを決め、4 班の研究を絞ることが重要な課題である。以上のことを踏まえるとジェンダー研究は適切なテーマとなる。さらに、開発を考える際、ジェンダーは避けてはならない

テーマであるため、有意義な研究になると思われる。

出版物の予定として、来年度から執筆準備、再来年度完成という計画を立て、出版物の内容は研究会と連動する形で検討していく。

今年度の活動の総括

今年度の主な活動は 11 月にオランダ・ハーグで開催された国際シンポジウムであった。ヨーロッパの事例を紹介され、行政改革の手法、民主主義の再生に対する議論がなされた。4 班に関連するのは、旧共産圏いわゆる移行期経済圏で起こっていることがアジア・アフリカに重なるためアジア・アフリカ研究者にとって興味深い内容となっていることである(斎藤)。

日本からの参加者はほとんどペーパーを用意しておらず、ヨーロッパの参加者の発表を一方的に聞くこととなった。今回のシンポジウムはヨーロッパの事例を研究するのに良い経験であったが、日本の地域研究やアジアの地域研究には貢献度が必ずしも高くない。また、この国際シンポジウムに膨大な費用をかけたことに関しても反省すべきところがあると思われる(中村)。

今年の予算配分について、研究員に予算を使って活動することが十分できなかったことは反省する点であり、来年度から活動のための資金運用の改善に努力する(斎藤)。

活動資金を有効的に使うため、4 班全体の枠組みと活動目標を立て、資金の量および使用目的に対する基準を研究メンバーに提示することによって、個人の研究活動を LORC の研究活動に効率よく組み込むことができると思われる(大林、河村)。